

奄美・琉球諸島を「捨て石」にする政府

2005年の「日米同盟—未来のための変革と再編」の合意以来、中国敵視戦略を取るアメリカ軍の一翼として、自衛隊は奄美大島、沖縄本島、宮古島、石垣島、与那国島へのミサイル部隊を中心に進出している。中国包囲陣形の一員として、最前線で自衛隊は活動をしていることになる。

中国軍との衝突があれば南西諸島は逃げ場がない戦場となり、再び本土防衛の「捨て石」にされてしまう。軍事評論家小西誠氏は「政府は琉球弧を『要塞化した琉球弧』に変えようとしている。中国軍というミサイル大国（核大国）に対して、根本的に防衛が成り立つのか。逃げ場のない南西諸島は、世界に向かって『非武装中立地域宣言』を出し、一切の軍艦の駐留を阻むべきだ」と主張している。

今年の防衛白書は、「中国脅威論」のもと、中国敵視政策をさらに拡大している。その一方で、自衛隊やそれに反対する住民の動きが見えてこない。東アジアの平和を考える人々にとって、中国に対する敵視政策の最前線となる奄美・琉球諸島の現状を知ることは必須の問題であり、中東派兵中の海上自衛隊部隊とこの地域に駐屯する陸上自衛隊部隊が「前線部隊」であることを自衛隊創立66年の今、確認をしておきましょう。



※資料は小西誠氏の自衛隊の南西シフトより

日米共同訓練を報じるMBC南日本放送。写真は旧種子島空港で、新空港開港後は使用されていない（滑走路が短い）。自衛隊は、このような南西諸島の旧空港などを、F35Bの基地として虎視眈々と狙っている



16年11月の自衛隊配備に反対する宮古島集会。沖縄選出の全国会議員が参加した

宮古島基地反対運動



奄美大島・名護市の街宣



石垣島基地反対運動